

## 南極物語(ECLAC便り(第7回))

著者	加賀美 充洋
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	3
号	2
ページ	26-27
発行年	1986-06-20
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00006734">http://hdl.handle.net/2344/00006734</a>

## 南極物語

南極に「万里の長城」があることを御存知の方は少ないでしょう。南極大陸の南米に近い所は、南極半島が鶴の首のように出ている。その北端に無数の島があり、サウスシェットランド諸島と呼ばれ、そのうちの一つ、ホルヘ王島（キングジョージ島）に中華人民共和国の基地が設置（1984年11月）されている。それが「万里の長城」基地と呼ばれるものである。周辺には、チリ、アルゼンチン、ブラジル、ウルグアイの他、ソ連、ポーランドの基地もあり、科学的目的のために活動を行なっている。

しかし、南極に対して各国が持っている興味は、科学的なものだけではない。領土を含め、海産資源、石油・鉱物資源、軍事上の理由等さまざまな思惑がからんでいる。チリに住んでびっくりしたのは、テレビのニュースや天気予報の番組にチリの領土として南極大陸の一部が出てくることだ。南極点に向かって西径53度から90度までの扇形の部分をチリは自国の領土であるといい、同国で地図を買うと、はっきりと南極チリ領土として載っている。チリの南極領土にける情熱は異常と思えるほどで、上記ホルヘ王島のチリ基地（ロドルフォ・マーチュ）周辺の人口約30人の「星々」村に女性を送り込んで子供を誕生させ、南極生まれのチリ人をしてたてている。これは、南極の領有権を強めるための方策だが、実はチリだけでなく他の国も南極に対して領土権を主張している。

隣国アルゼンチンは、南緯60度以南で極点に向かい西径25度から74度までを同国の南極領土と主張し、同地域にいくつかの基地を有している。フォークランド（マルビナス）島、サウスジョージア島、サウスオークニー島等を持つイギリスもやはり、南極に領土権を主張している。マルビナス紛争は単なるアルゼンチンとの領土問題だけでなく、南極大陸をめぐる領有問題にも関連していたのであ

る。この他、ノルウェー、フランス、オーストラリア、ニュージーランドが各々領土権を主張している。

チリとアルゼンチンの南極領土は重なる所（西径53度から74度まで）があり、両国は歴史的にもおたがいにこの問題でしごきを削ってきた。南極問題は古くは、1494年に「新世界」をスペインとポルトガルに二分した法王アレハンドロ六世の「トルデシリャス条約」までさかのぼるわけであるが、19世紀の後半から動きは活発になった。これは、イギリス、スウェーデン等の南極探検が盛んになったことによる（ちなみに、ノルウェーのアムンゼンが南極点に到達したのは1911年、イギリスのスコットは翌年である）。アルゼンチンは、早くも1884年に南極はパタゴニア地方の一部であると主張し、1904年には気象観測基地をサウスオークニー島に作った。1939年には、ノルウェーが南極の一部に同国を含め境界を設けるイニシアティブをとった。

1940年11月にチリのペドロ・アギレ・セルダ大統領は、チリの南極領土を西径53度から90度までと定め、アルゼンチンの強い反発にあった。アルゼンチンはすぐ1942年に、南緯60度以南で西径25度から68度34分までを同国の領土であると主張した。1947年には、チリの最初の基地（カピタン・アルトゥーロ・プラット）がサウスシェットランド諸島の一つグリニッジ島に建設された。1948年には、西径25度から80度までで両国の権利をお互いに認め合う共同コミュニケが出されたりした。

一方、ブラジルも南極に食指を動かし、チリとアルゼンチンの領有権は認めず、南極にラテンアメリカ・セクターを設け（0度から西径120度まで）、ラテンアメリカ諸国で分割しようと提案した。そして南極地域の鉱物資源や天然資源に興味を示し、探検隊を組織した。米国も1930年代から南極に関し積極的に行動し、1940年には、善隣政策により



## 加賀美充洋

(総務課長)

汎米諸国が南極に対し、その他の非アメリカ諸国より主権を主張できると表明したりした。こうした入り組んだ背景の下、米国は、1948年になると南極の国際化に向けて積極的に動くようになり、遂に1959年に「南極条約」が結ばれた。

「南極条約」には、米国、ソ連、イギリス、フランス、日本等の他、ラテンアメリカからチリとアルゼンチンが入り計12カ国により締結された。アルゼンチン、チリ、イギリス、オーストラリア等の領土権主張国と、国際管理を主張するソ連との間で米国は折衷案を出し、条約の有効期間中は領土権の主張を中止し、南緯60度以南の南極地域における軍事的措置と核爆発を一切禁止することを定め国際地帯にした。そして科学的目的のためだけに各国が利用することとした。領有権の主張は凍結されたわけである。30年たったら加盟国の



マゼラン海峡の渡し船メリンカ号操舵室に立つ筆者

発意で条約のレビューをすることができ、1991年とその年に当たる。そのため、80年代になると、各国とも活発な動きが、冒頭で述べたように出てきたわけである。たとえば、アルゼンチンは1978年以来7名の赤ちゃんを南極地域で誕生させ、またチリも同様なことをして領有権の既成事実化を図っている。

中国は、1985年から南極条約のメンバーになり、積極的に同地域に接近している。1980年から探検隊を出していたが、85年11月の探検隊は、チリ空軍が彼らを「万里の長城」基地まで空輸した。これまた驚いたことだが、サンチャゴにはソ連大使

館はなく、中国大使館があることだ。アジェンデ政権が倒れた時、軍事政権を認めたのは中国であり、これは当時の中ソ対立を反映したものであった。以後中国とチリの軍事政権は仲がよく、さまざまな交流が行なわれてきた。この南極空輸作戦もその一環といえる。筆者自身、昨年11月にプンタアレナスからマゼラン海峡を越えて、ティエラ・デル・フェゴ島まで旅をしたが、その時プンタアレナスの「ホーン岬ホテル」で中国の探検隊と一緒にになった。

最近、マレーシア等を中心にして国連の場で南極を全人類のための共有財産とし、国際地帯にしようとする動きがあり、チリやアルゼンチンは神経を尖らせている。「南極条約」の見直しに関しては、賛成が増えており、1991年に向けてさまざまな南極外交が展開されようとしている。前号で紹介した、アルゼンチンとチリの「平和友好条約」締結により、二国間のビーグル海峡とその近くの三島をめぐる領土問題は終止符が打たれたが、両国を分かち海域の境界線については、南極についての両国の領有権に何ら触れないようになっていた。二カ国は、南極に関して、その領土権を主張することで共同歩調をとることは明らかである。しかし、その線引きとなると、すでに説明したように話はまったく噛み合わないのである。

チリ、アルゼンチンからは、12月、1月のシーズンになると南極向けの観光が盛んになり、日本人も気軽に南極に行けるようになった。白い大陸南極は、タロー、ジローの犬物語や、ペンギンの憩いの場所から、今や南極っ子が生まれ、その領有をめぐる生臭い時代に入ってきたのである。

追記——筆者は、4年間にわたる現地勤務を終え帰国しました。これもちまして「便り」を終わらせて頂きます。アディオス、アミーゴス。